

October 2004



初放流祝電披露号

尻別川の未来を考える
オビラメの会

生涯、忘れることのできない日

「尻別川の未来を考える オビラメの会」会長
草島清作

「2004年9月25日」。この日は、オビラメ会にとっても、会員のみならず方にとっても、生涯忘れることのできない日となりました。オビラメ稚魚放流、待ちに待った日でありました。

当会発足以来、この日の来ことを一日も早くと待ち望んでいたのですが、さて当日に近づくにしたがって、一抹の不安が心の奥底に蟠（わだかま）っております。箱入り娘を嫁に出す親の気持ちは斯（か）くありなん、と頷（うなづ）けるものがあります。嫁入り先の家庭はどうなのか。姑さんのご機嫌は――などなど、気を揉む親心が放流前夜まで悶々と続いた毎日でありました。

試験放流ではありますが、当歳児の放流時期はこれでよかったのか、稚魚生育に必要な餌が豊富にあるのか、この川に在来している魚たちの恰好の餌になりはしないか、流域田畑からの農薬の流入はないのか、河川改修などの弊害は、鳥からの攻撃弊害などはないのか、できれば側にいて、これらの諸弊害から稚魚たちを守って居て遣りたい気持ちで一杯である。それも出来ないなら、せめて今冬は暖冬であって欲しいと祈らざるを得ないのであります。

……しかし、よくぞここまで漕ぎ着けたものと、我ながら感心しています。これもみな、会員のみならず方々の献身的努力の賜（たまもの）と感じています。特に親魚の飼育管理の高橋秀邦氏、事務局長の吉岡俊彦氏にはご苦労をおかけいたしておりますが、これからも



2004年9月26日、放流翌日のオビラメ稚魚。撮影・鈴木芳房氏

尻別イトウの再生を目指してよろしくお願いたします。また川村洋司先生、江戸謙顕先生、さらにはパタゴニアさん、コンサベーション・アライアンス・ジャパンさんはじめ、ご支援くださっている全てのみならず、今後ともどうぞよろしくお願いたします。

わがオビラメ会の何と素晴らしい会であることか、天晴れと誇りさえ感じております。発足当初は、稚魚放流が第一の課題であり、目標でありましたが、現実にオビラメ会30年計画の第一章を達成できたのです。

しかし、これからが本番。第二章、第三章と続くのであります。これから、さらなる再生産拠点の探索、生産拠点の確立、保護区の設定、生息環境の整備、再生産環境整備、イトウ釣り場の造成、イトウフィッシングルールの確立、天然再生産の確立などなど、枚挙に暇がないほど問題が山積しております。

「イトウの住める・イトウの釣れる尻別川」の再生を目指して、2030年のオビラメ会解散を目指して頑張らましよう。尻別イトウ初放流に当たったの所感でした。

オビラメの会シンポジウム in さっぽろ 「イトウ再導入への挑戦」 入場無料

10月28日（木曜日）午後6時半～8時半

北海道環境サポートセンター 札幌市北区北7条西5丁目5番

お問い合わせはオビラメの会事務局（電話 0136-44-2472）まで

蛭田 弥希 NHK 札幌放送局・カメラマン

北海道にはイトウという巨大な魚がいる。私は子供の頃からその存在を知っていました。しかし、私の中では「幻の魚」という枕詞だけがイトウを知るすべてで、果たして実在する魚なのか、それとも突然変異の賜物で文字通り幻のものなのか、それすら知らない状態でした。

この夏に転勤で札幌にやってきて、

尻別川のイトウとオビラメの会を知り、飼育池のイトウを初めて見たときは、ほとんど感動に近いものがありました。

その大きさ、そして太さ、存在感。小一時間、見入ってしまいました。

会の皆さんがイトウにかける情熱が、少しだけ理解できた気がしました。

今回初めての稚魚放流に立ち会うことができ、とても光栄に思います。川に

放された稚魚たちを見つめる皆さんの表情が、とても印象的でした。今回の取材を通して、ようやく放流に漕ぎ着けたものの、イトウ復活までにはまだまだ課題が山積していることもよく理解できました。

これからも報道という立場から、皆さんの活動をお手伝いできればと考えています。

秋葉 健司 オビラメ稚魚モニタリングチーム

というわけで感想は一言「疲れた。」に尽きます。休暇のしわ寄せで出勤してメールを開けると「宿題のお願い」。また疲れた。今朝はまともに起きられませんでした。ちなみに現地に行ったにもかかわらず、疲れすぎていて放流の現場には立ち会えませんでした。

昨日のお話のように見切り発車ですが、とりあえず「サイを投げた」ことは評価できます。皆さんの覚悟が本物であるかどうかは4~8年後の彼らが評価してくれることでしょう。まずは11月のモニタリングの結果が重要ですが、

今回のプレモニタリングに際し、私が主張し、江戸さんが吉岡さんをお願いした結果、思っていた以上のサポートが得られたことに深く感謝します。このサポートがなければプレモニタリングは破綻し、稚魚の放流には成功しても、放流行為を生態学的見地から検証することは永久に不可能になってしまうところでした。

親魚の確保、種苗生産、河川環境の改善、行政及び地元住民の理解と協力などの面でやらなければならないことは数多くありますが、この実績の積み重

ねはオビラメの会が他の地域のイトウ保全におけるロールモデルになっていくという点においても重要なことだと思えます。

私個人としては微力ながら大光明くんをはじめとする若手の育成をサポートできればと考えています。今後とも宜しく願いいたします。

尚編集長におかれましては是非モニタリング調査に参加して頂き、その文章に現場を知るものにしか表現できない深みと凄みを増して頂ければ幸いです。

沼田 雄一 公務員・室蘭市

2004年9月25日、記念すべきオビラメ稚魚の初放流に参加することができた。はじめて見るオビラメの子どもたちは、素人目には何の稚魚だか良くわからない風貌だったが、長旅の疲れも見せず、バケツに移されても元気いっぱいだった。

放流直後は流れに押されて岸際にかたまっていたり、水面をぷかぷか漂っていたりして、手の平で簡単にすくえてしまったが、徐々に水草や落ち葉の隙間に入り込んでいたり、張り出した木の根のそばでじっとしていたりと、少しずつ生き物としての本能を取り戻しているかのようだった。また、バケツを水面につけた際に、入り込む川の水を溯っていっせいに泳ぎ出す姿は、人工授精&孵化場育ちとはいっても野生味を感じさせた。

彼らのうちのいったい何匹が、次の世代を残すまでに成長することができ

るだろうか。来年の春を待たずして、他の生き物の糧となるものたちも大勢いることだろう。

それでも、数年後、この川で赤く色付くまでに成長した彼らを見ることができたなら、どんなに素晴らしいだろう。それは、「オビラメの復活」のみならず、「オビラメや他の多くの生き物を養っていた30年前の尻別川の復活」へ向けての前進を意味する。解決しなければならぬ課題は数多くあるが、体長4cm足らずの彼らの命を無駄にしてはならないと、強く思う。

これまで、我々は自らの生活のために他の生き物の住処を奪い、多くの種を絶滅へと追いやってきた。豊かになったといわれる現在でも、尻別川のイトウ「オビラメ」は絶滅危機種のままである。

そろそろ、他の生き物たちに住処を返しても良いのではないだろうか。少

しぐらい場所を譲ったとしても、我々の生活は十分すぎるほど豊かではないだろうか。世界中で始まっている「失われてしまった生き物の住処を復活させる取り組み」は、これまでの我々の行いの罪滅ぼしに思えてならない。

「今現在もいないし、これからいる可能性もまったくない」と「今現在はいるが、これからいる可能性はゼロではない」とでは、同じ「いない」でも天と地ほどの差がある。たとえ今はいなくても、将来いるかもしれない可能性まで潰してはならない。それは、今を生きる我々の世代の責務である。

人の手によって野に放たれたオビラメの子どもたちには、何の責任もないとわかってはいても、厳しい環境を生き抜く彼らの姿が、多くの人々に、これからの人類のあるべき姿を思い起こさせてくれることを、願ってやまない。

上畑 勇騎 北海道工業大学3年

2004年9月25日(土)はとても思い出深い日となりました。イトウの稚魚放流が行なわれ、イトウ再生の大きな第一歩となる出来事がありました。私は以前から「イトウが減らないで欲しい」と漠然と思っていました。その思いがこのように具体的な形となり、うれしく思います。

稚魚放流は「ホッ」と胸をなで下ろす感慨深いものでした。バケツから元気に泳ぎだし、それぞれ思い思いに身を隠す様子を見て、「もっと見ていたい」気持ちを抑え、「早く隠れろ! ガンバレ!」と心で一言。放流したときの草島会長を見て、「娘を嫁に出した父さんを

見ている息子」に自分になったような、なんとも妙な気持ちになりました。

これからはイトウを一般の人々にもよく知ってもらいたいです。この先、里親制度が確立し、各々小学校などでも飼育することができれば頼もしく思います。これが実現すれば、イトウを育てた子どもたちはイトウを忘れないことでしょう。小学生の子どもたちが放流した稚魚が成魚になるのは、その子どもたちが大人になることです。長い年月をかけたイトウを知ってもらおう大作戦となるでしょう。また女性会員が増えてくれることにつながれば頼もしいですね。

イトウは成長の遅い魚です。今回放流した稚魚たちが産卵できるようになるまでには、まだまだ時間がかかります。その間に私たちはイトウが育つ・産卵できる川づくりをしなければなりません。私は30年計画という長い年月を生かし、イトウの知識を増やしていきたいと思います。

今回の放流が始まりであり、決して終わりではありません。オビラメ放流会に参加したことをイトウ保護への強い気持ちに置き換え、私も一員としてこれからもオビラメの会に参加します。

玉井 秀樹 パタゴニア大阪

稚魚放流。この言葉だけを聞けば、新鮮さや驚き、感動は皆無だ。特に本州で釣りを楽しむ人間にしてみれば、漁協のおじさんたちが資源維持の一環として行っている光景や、あるいは情操教育の一環として子供たちが行なっている光景を想像しがちだ。

ところが今回の放流はこれらとは一線を画す。尻別川をイトウに溢れていたかつての豊かな川に戻すための大きなステップの一つとして、いち草の根団体が待望の稚魚放流を行ったのだから。しかも放流する稚魚はイトウならなんでもいい訳ではなく、あくまでも尻別川産のイトウの親魚から採れた稚魚でなければ意味がない。だからこそ、今回の稚魚放流は意義深い。

私が会の活動にかかわらせてもらうようになってからまだ四年半ほどしか経っていないが、会の活動の歴史はもちろんそれ以上に長い。会の創設メンバーのみなさんや飼育にかかわってきた皆さんから、尻別川産イトウの種苗

確保にこれまでどれだけ汗と涙を流し、時間と情熱を傾け、家族にも迷惑をかけてしまっているか、よく聞かせてもらった。実際自分も飼育にかかわったことがあるため、そういった活動の延長線上に今回の稚魚放流があることを考えると、ひときわ感慨深い。家族からの信頼回復も少しはできた(と思う)。

もちろん、喜んでばかりはいられない。稚魚を河川に放ったということは、明確な期限、いわゆる「締切日」がまた一つできたということだ。5、6年後には、これらの稚魚が成魚となって帰ってくるだろう。そのときまでに、彼らが産卵可能な環境を復元しておかなければ、今回の放流の意味がなくなってしまう。そうならないように我々がこれからやるべきことは、まずダムや堰堤の撤去、もしくは遡上を妨げない形状への改修だ。

河川やその人工構造物の管理を行なう公的機関の対応は、以前に比べると

かなり柔軟度が上がってきている。地域住民の声に耳を傾け、長期的視点に立って真摯な対応をする人たちが増えてきていることを実感する。逆に硬直した対応しかできない、いわゆる「お役人」的な人はかなり減ってきており、そんな方はどうかこのままイトウに代わって「絶滅」していただきたい。イトウを通じて河川環境を復元するという試みが成功するかどうかは、われわれオビラメの会だけではなく、公的立場の人を含めた今この世に存在するすべての人の手に委ねられている。

未来に想いを馳せると、成長し上流へ産卵遡上してきたイトウが目に見えぬ。実現の日はきっと来るだろう。私は、今回の稚魚放流には大変残念ながら参加できなかったが、偶然にもその翌日に誕生したわが子と一緒に、今度は尻別川のほとりでその日を迎えられるよう、しっかりと活動を続けていこうと思う。

2004 北海道イトウ保護フォーラム in あっけし

「チライの里・道東でイトウの将来を考える」

11月20日(土) 別寒辺牛川砂防ダム視察/イトウ保護連絡協議会総会

11月21日(日) 2004北海道イトウ保護フォーラム in あっけし

入場料(フォーラム) 一般200円 イトウ保護連絡協議会加盟団体会員500円

会場 ネイパル・道立厚岸少年自然の家

主催=イトウ保護連絡協議会 主管=別寒辺牛川流域イトウ保護連絡協議会

パネリスト決定!(50音順)
石沢元勝氏(別寒辺牛川流域イトウ保護連絡協議会代表) / 川村洋司氏(北海道立水産孵化場主任研究員) / 草島清作氏(オビラメの会会長) / 小宮山英重氏(野生鮭研究所主宰) / 山代昭三氏(北海道教育大学名誉教授) / ほか

祝！オビラメ稚魚初放流

当歳1789匹を尻別川水系俱登山川支流流域に

当「尻別川の未来を考える オビラメの会」(草島清作会長)は9月25日、同会として初めて、人工孵化で誕生させた尻別川産イトウ=オビラメの稚魚を尻別川水系に放流しました。

「オビラメ復活30年計画」に基づいて尻別川産イトウ個体群の保護・復元を目指している当会は、飼育中のイトウ親魚から得た受精卵を用いて2年連続して人工孵化に成功。平行して進めてきた尻別川水系の踏査を通じて、イトウ個体群の復元を図る最初の拠点となる「重点河川」に倶知安町北部を流れる俱登山川(尻別川支流)水系を選定し、尻別川産イトウの「再導入」(かつて歴史的に分布が認められながら、その種が絶滅したか、絶滅に向かってような地域に、種を再び定着させる試み(こと)に備えてきました。

9月4日の「オビラメ勉強会/オビラメ稚魚放流のための作戦会議」で放

流日程を決定した後、川村洋司会員(北海道立水産孵化場主任研究員)が放流稚魚全個体のチェックと標識つけ(アブラビレ切除)を行ないました。また江戸謙顕会員(学術振興会科学技術特別研究員)をリーダーとするモニタリング・チームが、あらかじめ放流地点付近の河川構造、魚類相・昆虫相・植生などを詳しく調査しました。いずれも、この放流がどのような成果を生むか、後にきちんと評価するために欠かせない事前準備です。

同時に、吉岡俊彦事務局長が放流地点周辺の農家さんや関係自治体機関などを訪問しながら

ら放流計画を説明し、協力をお願いしてきました。

好天に恵まれた放流会当日は、会員を中心にマスメディアの記者も含め約20人が参加。俱登山川流域の数カ所に、合わせて1789匹のオビラメ稚魚を放流しました。(平田剛士、写真も)



流れの中にオビラメ稚魚をそっと放つ(2004年9月25日)

あなたもなれます！

オビラメ稚魚の追跡調査員

放流したイトウの稚魚たちは、一目で放流魚だと分かるように、すべてアブラビレを切除してあります(アブラビレがなくても稚魚たちの生活に支障はありません)。

とはいえ、放流時の稚魚たちは体長約4センチ、体重約0.6グラム。追跡調査は簡単ではありません。

そこで、尻別川で釣りや川遊びをされるみなさんにも、ぜひご協力をお願いしたいのです。尻別川で小魚を見つけて「イトウかな?」と思ったら、下記のオビラメの会事務局まで、どうぞご一報ください。イトウ稚魚を見分けるための早見版「オビラメ・レスキュー・カード」はオビラメサイトでダウンロードできます。

ご 支 援 歓 迎

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えてお振り込み下さい(手数料はご負担願います)。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末(5月)までです。概ね1月以内に会員証とニュースレターをお届けします。

■年会費2,000円

■郵便振替02720-9-11016

■加入者名「オビラメの会」

「オビラメの会」ニュースレター 第20号(2004年10月発行)
OBIRAME Newsletter No.20 October 2004

- 発行 ■ 尻別川の未来を考える オビラメの会
- 編集 ■ 平田剛士
- 印刷 ■ クリエイト・M (北海道滝川市緑町5-3-5)
- 発送 ■ 吉岡俊彦
- 郵便振替 ■ 02720-9-11016 加入者名「オビラメの会」
- オビラメの会事務局 ■ 北海道虻田郡ニセコ町富士見65「ライズ」内
吉岡俊彦 方 〒048-1501 TEL/FAX 0136-44-2472

copyright 2001-2004 Obirame no kai
<http://homepage3.nifty.com/huchen/Obirame/index.html>

水と空気、みどりの大自然
ニセコが好きだ
楽しんだあとは川を語ろう

御食事処・酒房

ライズ

ニセコ町富士見65 TEL/FAX 44-2472
Email / itou110@estate.ocn.ne.jp